



日本語学習者のストーリーライティングにおける格助詞の発達と予測 : B-JASおよびJASWRICデータを基に

張, 晶鑫

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 481:1-13

(Issue Date)

2025-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100493755>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493755>



日本語学習者のストーリーライティングにおける格助詞の発達と予測

—B-JAS および JASWRIC データを基に—

張 晶鑫(湖北大学)

zjx-kobe@hotmail.com

The Development and Predictability of Case Particles in Japanese Learners' Story Writing

—An Analysis of B-JAS and JASWRIC Data—

ZHANG, Jingxin (Hubei University)

概要

本研究は、格助詞が日本語学習者にとって重要かつ難度の高い項目であることを踏まえ、B-JAS および JASWRIC のデータ基に学習者の格助詞の発達傾向を明らかにした。その結果、学習者の格助詞使用は全体として上昇傾向にあり、使用量の増加スピードも比較的速いこと、一方で、母語話者の小学校 4 年生のレベルには達しておらず、特定の格助詞の使用に偏っていること、誤用のパターンは「逆 U 字」型、「減少」型、および「波」型の 3 種に分類されること、「に」の使用頻度から学習者の日本語能力の 20～30%を予測できることが示唆された。

キーワード

格助詞、発達傾向、誤用、日本語学習者

1. はじめに

日本語の格助詞は、文節同士の関係を示す「格」として重要な文法的役割を担っている。また、他の助詞に比べて使用頻度が高く、バリエーションが豊富であるうえに、名詞や動詞のように発話内容や発話場面の影響を受けにくいという特徴がある。こうした特性を踏まえると、学習者の格助詞の使用状況を観察することで、日本語能力を効率的に推定できる可能性があると考えられる。

一方で、西川・青木(2020)は、日本語を母語とする場合でも、格助詞の習得順序やタイミングが、研究方法(自然発話や実験)や習得の基準(初出・正答率)によって異なることを指摘している。また、水口・森山(2006)の調査では、母語話者と第二言語学習者の間で、格助詞の意味構造に対する認識に違いがあることが明らかになっている。

そこで本研究では、日本語母語話者と日本語学習者を比較し、格助詞の発達過程と誤用パターンを明らかにするとともに、格助詞の使用状況から日本語学習者の発達段階を予測する可能性を探ることを目的とする。

2. 先行研究

母語話者による格助詞習得の研究は、1990 年代以降活発に行われるようになり(白畑・久野, 2008)、特に児童を対象とした研究が多く蓄積されている。例えば、藤友(1979)の研究では、4～6 歳の幼児において助詞の習得が早く、特に格助詞の習得が最も早いことが示されている。使用回数は年齢とともに増加し、習得順序は「に」「が」>「の」>「を」>「と」>「で」となり、さらに「へ」「や」「より」の 3 つはこの年齢層では使用頻度が低いことがわかった。鈴木(2007)は、年長児が 9 割以上の正解率を示す一方、年少児と年中児の正解率は全体的に低く、5 歳前半までの幼児においては、格助詞「が」や「を」の文法知識が未発達である可能性があることを指摘している。趙墨(2015)は、日本語を母語とする 5 歳児 33 名を対象に行った実験において、人工格助詞を用いた文理解から、動作主を示す格助詞と被動者を示す格助詞のそれぞれに有効な言語情報が存在する可能性が高いことを示唆している。村尾(2024)は、小学 2～5 年生の児童 7 名を対象にした調査で、意味情報と統語情報の相違が文法関係と格助詞のずれに影響を与え、これが文処理に強く影響を与えることを明らかにした。このように、母語話者の幼児における格助詞の習得は比較的早く進むが、習得の順序が存在し、その使用は前後の言語情報に影響を受けることが確認された。

第二言語習得に関する研究では、日本語学習者の格助詞に関する報告も多く存在する。野田他(2001)は、L2 として日本語を学ぶ学習者にとって、格助詞が難しい学習項目であることを指摘している。白畑・久野(2008)は、10 歳の中国人児童 1 名の来日後 4 ヶ月間の日本語の発話データを分析した結果、最初に観察されたのは助詞の脱落であり、「の」が比較的早い段階で適格に使用されたことがわかった。しかし、「へ」「まで」「より」の適格表現は、習得最初の 4 ヶ月間には観察されなかった。西川・青木(2020)は、小学 4～6 年生(日本生まれ・育ちで日本語を第二言語とする JSL:122 人、日本語モノリンガル Mono:427 人)を対象に行った調査で、JSL の子どもが格助詞を Mono の子どもたちと同程度に効率的に運用できないことを明らかにした。彼らは長年日本語に触れ、日常会話には困らないものの、格助詞の運用に関しては周囲の大人の注意が必要であることが示されている。

3 つ目は、個別の格助詞の意味構造の解明に関する研究であり、その中で認知言語学に基づいたアプローチが多く見られる。例えば、森山(2002)は、格助詞「で」の意味が、「前景を構成する動作連鎖全体に対し、ある背景(事態成立の基盤やさま)を補足的に示す」という共通のスキーマによって結びついていることを明らかにした。また、于康(2013)は、中国語母語話者の日本語学習者にとって、格助詞「に」「が」「で」「を」の不使用が特に顕著であることを示し、格助詞「が」の不使用の原因として母語干渉、過剰一般化、文体選択エラーを挙げている。初・玉岡・早川(2013)は、場所を表す格助詞「で」と「に」の習得に関する研究で、動詞の難易度や自他性、名詞の場所や位置の特性が複雑に影響しながら習得が進行することを明らかにした。石川(2017)は、現代日本語書き言葉均衡コーパスの 7 ジャンルから収集した 700 用例に基づき、格助詞「で」の意味役割を調査し、個々の意味役割が特定の名詞群によって具現化されるとともに、前後文脈が重要であることを示した。李(2023)は、中国語母語話者の日本語学習者における「を」の不使用と過剰使用の誤用データをもとに、前接詞が助詞である場合の「を」の後接の可否や学習者の誤用要因を検討し、

誤用の主な原因は文法ルールの未理解であると指摘している。

このように、格助詞「が」「を」「に」「で」に関する個別の研究は多くあるが、格助詞全体をまとめて扱った研究は少ないのが現状である。本研究では、主要な 10 種の格助詞を研究対象とし、格助詞の発達と日本語学習者の日本語習得段階との関連を検討する。西川・青木(2020)が指摘するように、日本語母語話者においても格助詞の習得順序やタイミングは研究方法や習得の基準によって異なる。本研究では、大規模な縦断コーパスを用いてこの問題を検証し、格助詞の習得順序に関して、母語としての言語獲得と第二言語習得の間に違いがあるのかについても検討する。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

すでに述べたように、本研究の目的は、日本語母語話者との比較を通じて、日本語学習者の格助詞の発達を解明し、格助詞を用いて日本語学習者の発達段階を予測できるかを検討することである。これを踏まえ、本研究では以下の 2 つのリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1 日本語学習者の格助詞の習得には、日本語母語話者と比べてどのような傾向が見られるか。また、どのような誤用パターンがあるか。

RQ2 格助詞を用いて、日本語学習者の発達段階を予測することは可能か。

3.2 データ

本研究では以下の 2 つのコーパスを使用する。

1 つ目のコーパスは、『北京日本語学習者縦断コーパス』(B-JAS: Beijing Corpus of Japanese as a Second Language)である。このコーパスは 2023 年 3 月に公開され、中国の日本語を専攻する大学生 17 名の 4 年間にわたる産出データを収集している。データ収集は、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS: International Corpus of Japanese as a Second Language)のタスク枠組みを参考に行われ、タスクには、ストーリーテリング(ST、4 タスク)、対話(I、2 タスク)、ロールプレイ(RP、4 タスク)、絵描写(D)、ストーリーライティング(SW、4 タスク) 作文データ(F、11 回)の 6 種類 26 タスクのデータが含まれている。このうち、本研究では、SW1 と SW2 を使用する。

表 1

B-JAS データセットの概要

学年	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次	
調査回	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
時期	1 月	5 月	10 月	4 月	9 月	4 月	10 月	4 月

2 つ目のコーパスは、『小中高大生による日本語絵描写ストーリーライティングコーパス』(JASWRIC: Japanese Students' L1 Story Writing Corpus)である。このコーパスは『多言語母

語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS:International Corpus of Japanese as a Second Language)のストーリーライティングタスク(SW)に基づき、図 1 に示す 2 つのイラスト描写課題を採用している。小学校 1 年生から大学 1 年生までの日本語母語話者 700 名による作文データで構成されている。JASWRIC は一般的には横断コーパスに分類されるが、学年ごとに群化されており、これにより習得プロセスを間接的に観察することが可能である。具体的には、「疑似縦断分析法」を用いることで、学習者の「発達の道筋」を追跡することが可能である(石川, 2023)。

表 2

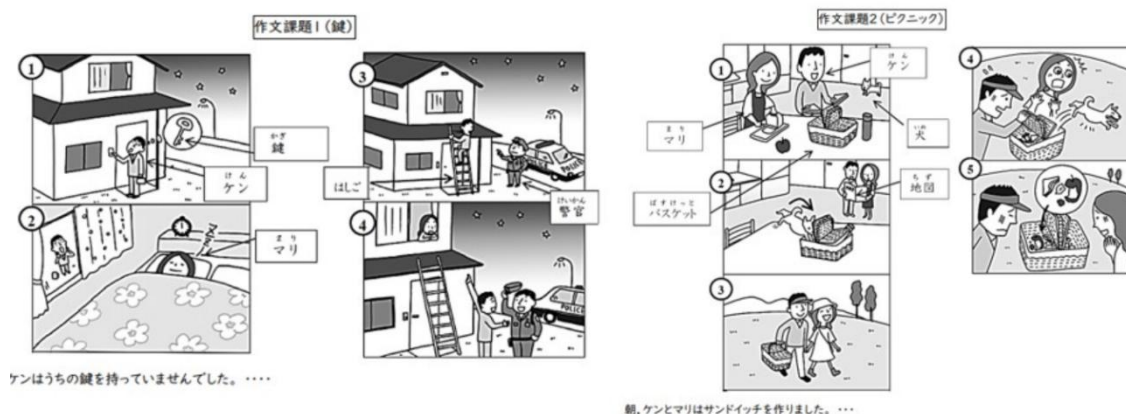
JASWRIC のデータセットの概要

学年	人数	作文数	学年	人数	作文数
G01 (小 1)	37	74	G08 (中 2)	112	224
G02 (小 2)	43	86	G09 (中 3)	45	90
G03 (小 3)	35	70	G10 (高 1)	90	180
G04 (小 4)	27	54	G11 (高 2)	86	172
G05 (小 5)	58	116	G12 (高 3)	30	60
G06 (小 6)	62	124	G13 (大 1)	53	106
G07 (中 1)	22	44	以上合計	700	1,400

すでに述べたように、B-JAS および JASWRIC には『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』から以下の 2 つのストーリーテリングタスクが含まれているため、両者を比較することは可能である。そのため、本研究は SW1 と SW2 のデータのみを使用することとする。具体的には、B-JAS の第 1 回(1 年次)、第 3 回(2 年次)、第 5 回(3 年次)、第 7 回(4 年次)に収集された SW1 および SW2 のデータのみを研究対象とする。

図 1

SW1 と SW2 のタスクに使用されている 2 つのイラスト(JASWRIC のホームページより引用)



3.3 手法

本研究では、B-JAS の検索インターフェースである中納言を使用し、品詞タグに基づいて学年別の格助詞のタイプ使用量とトークン使用量を調査する。また、JASWRIC のデータについては、JASWRIC_Tagged_v1.1 の品詞タグを基に調査を行う。誤用の判定は筆者が手作業で行い、判断に迷った場合には 1 名の日本語母語話者の協力を得ている。RQ2 に関しては、まず SPOT と J-CAT の得点を従属変数とし、各格助詞を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行う。SPOT は、自然な速度で読み上げられるひらがな 1 字を穴埋めする形式で、日本語能力を短時間に測定するツールである。J-CAT は、聴解、文字・語彙、文法、読解の 4 つに構成された適応型テストで、日本語能力を効率的に測定することができる。

次に、9 種類の格助詞(「や」はすべての対象で使用されなかったため、調査対象から除外)を第 1 アイテム、13 学年の母語話者のデータと 4 学年の学習者のデータを第 2 アイテムとしてコレスポネンデンス分析を実施する。コレスポネンデンス分析はアイテム間の関係を可視化する手法であり、本研究では、格助詞の使用量と学年の上昇との関連を視覚的に示すことを目的とする。

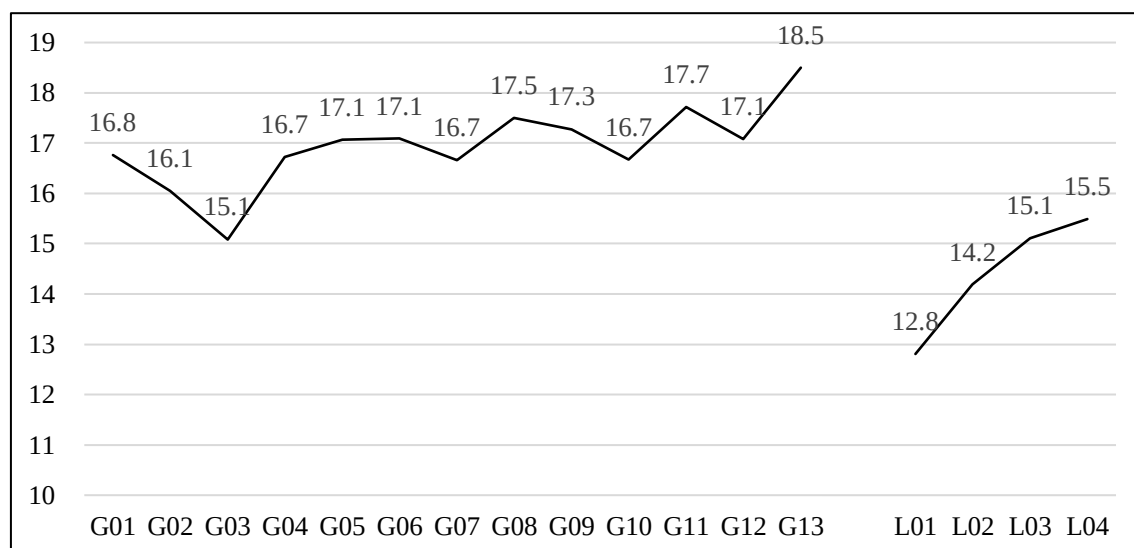
4. 結果と考察

4.1 RQ1 格助詞の発達傾向

JASWRIC と B-JAS を調査した結果、L1 日本語話者小学校 1 年生(G01)から大学 1 年生(G13)までの 13 学年、および日本語学習者の 1 年生から 4 年生までの 4 学年における格助詞のトークン使用量を調べたところ、以下の図が得られた。

図 2

学年別の格助詞のトークン使用量



格助詞のタイプ使用量については、全体で 10 種の格助詞を研究対象としたが、「より」や「や」の使

用は、どの学年においてもほとんど確認されなかった。この結果は、タスクに使用されたイラストの描写において、これら 2 つの格助詞が使用されにくかったためだと考えられる。

上記の図からわかることは、以下の 3 点にまとめられる。まず 1 点目は、第二言語習得との比較は日本語母語話者の 3 年生以降から行うべきだということである。石川他(2023)では、小 2 と小 3 の間に見られる相対的に大きな伸長が、書き言葉における L1 発達における「発達の節目」を示唆していると指摘されている。本研究では、格助詞の使用量の変化に注目しているが、G01 から G03 までは使用量が大きく減少し、その後再び増加している。この明らかな境目は、日本語母語話者にとって 2 年生までは認知発達が進行していることを示している可能性がある。森山(2010)も、子どもの母語習得は認知発達とともに進行することを指摘している。さらに、母語習得と第二言語習得の違いについて、森山(2010)は第二言語習得が認知発達の終わった後に行われることが多いと述べている。藤友(1979)、鈴木(2007)、趙墨(2015)による、日本語を母語とする幼児を対象とした研究と成人学習者の結果を比較する際には、言語発達の違いだけでなく、「認知発達」の影響も考慮する必要があることが示唆されている。2 点目は、日本語母語話者の格助詞使用量は上昇傾向にあるが、日本語学習者も格助詞の使用量に上昇傾向を見せており、その増加のスピードは日本語母語話者より速いということである。サンプルサイズが比較的小さい G04、G07、G12 の影響を除外すると、日本語母語話者の使用量は緩やかな上昇傾向を示している。それに対して、日本語学習者のデータでは、4 年間で約 20% も増加している。この上昇に関しては、3 つのパターンが考えられる。1 つ目は、産出量が安定し、格助詞の使用量が増加するパターンである。2 つ目は、格助詞の使用量が安定し、産出量が減少するパターンである。3 つ目は、産出量も格助詞の使用量とともに増加するパターンである。本研究のデータからは、産出量と格助詞の使用量がともに増加していることが確認できる。このことは、学年が進むにつれて学習者が多くの格助詞を使い、名詞と述語または名詞同士をつなげて多くの文を産出していることを示している。この点から、学習者の格助詞の産出量を観察することで、学習者の日本語の発達を追うことが妥当性であることがわかる。3 点目は、L04 と G04 を比較した場合、日本語学習者は 4 年間の学習を終えても、格助詞の使用量においては 4 年生の日本語母語話者に達していないということである。この点については、以下の用例をみてみよう。

G04(小学校 4 年生の日本語母語話者)の用例:

ピクニック[1]に行くじゅんぴ[2]をしながら、地図[3]を見て、行き先[4]をもう一度かくにんしました。地図[5]でかくにん[6]をしているとき、サンドイッチ[7]がある[8]を知った犬はバスケット[9]の中[10]に入りこみました。そして、ピクニック[11]の場所[12]につき、サンドイッチ[13]を食べようと、バスケット[14]をあけたしゅんかん...バスケット[15]の中[16]から犬[17]がとび出してきました。犬[18]が何か[19]をくわえているの[20]に気[21]が付き、いやな予感[22]がしながら中[23]をかくにんすると、食べるため[24]のサンドイッチ[25]が犬[26]に食べられてしまっていました。

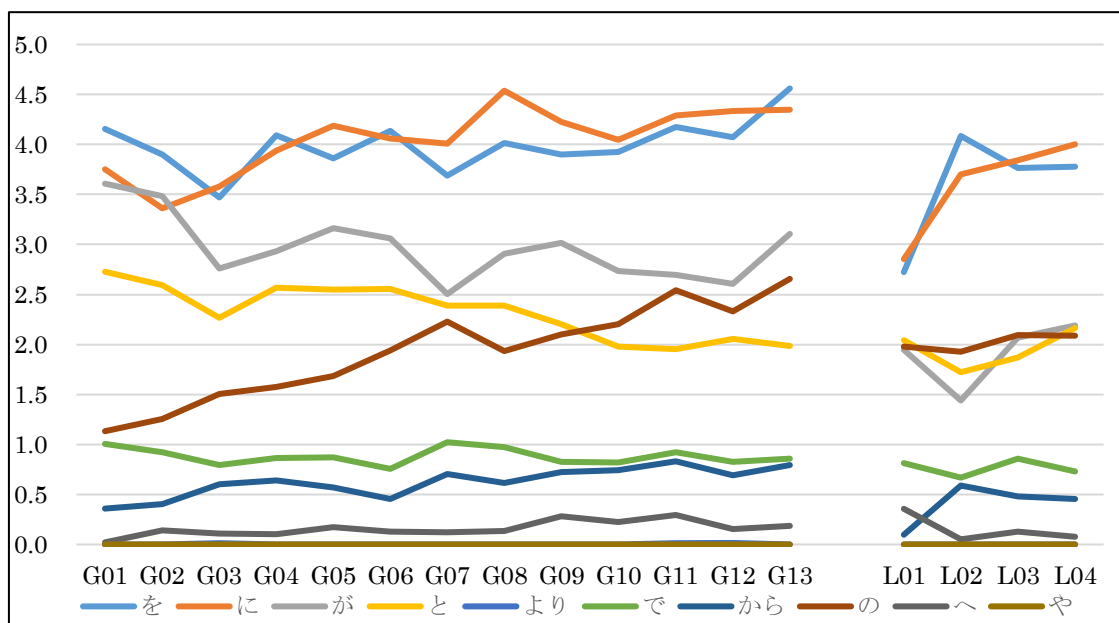
L04(日本語学習者大学生 4 年生)の用例:

サンドイッチ[1]を作ってきた後、二人は地図[2]を取り出して、路線[3]を確認しました。その時、ずっと近く[4]にいる犬[5]がバスケット[6]に入れ込んでしまいました。二人はそのこと[7]を気づかないまま[8]で、予定[9]のピクニック・スポット[10]に着きました。そして、バスケット[11]を開けると、犬[12]が飛び出して、二人はびっくりしました。バスケット[13]の中[14]にちゃんと見ると、リンゴ[15]とサンドイッチ[16]がすべて犬[17]に食べられてしまった。

上の用例を踏まえ、G04 の格助詞の調整使用頻度は「格助詞の使用量／総語数×100」の式で計算すると、 $26/121 \times 100 = 21.49$ となり、L04 の調整使用量は $17/99 \times 100 = 17.17$ となる。両者の違いを観察すると、日本語学習者に比べて、小学校 4 年生の日本語母語話者の方がより詳細に描写していることがわかる。冒頭の 1 文を例に取ると、両者が説明しようとしている内容は非常に類似しているが、G04 では、「ピクニック[1]に行くじゅんび[2]をしながら」というように、2 か所で格助詞を使用している。一方、L04 では、「サンドイッチ[1]を作ってきた後、」という表現で、1 か所のみ格助詞を使用している。また、最後の部分でも、G04 では「犬[18]が何か[19]をくわえているの[20]に気[21]が付き、いやな予感[22]がしながら」となっているが、L04 には該当する部分が見当たらなかった。この違いの根本的な理由は、日本語母語話者と学習者の従属節の使用の有無と多さによると考えられる。上記の用例に示されているように、日本語母語話者は多くの従属節を用いて状況をリアルに説明しようとしており、その結果、1 文あたりの長さが自然と長くなり、それに伴い格助詞の使用頻度も増加する。

以下は格助詞別の使用量の変化を示す図である。

図 3
格助詞別の使用量変化



先行研究では、習得順序に関して 2 つの観点が存在する。1 つは初出に基づくアプローチ、もう 1 つは正用頻度に基づくアプローチである。前者の代表的な研究としては長野 (1959) や松本 (1998) があり、後者には八木 (1996) が挙げられる。本研究では、使用頻度に着目した調査結果をもとに整理すると、以下のような結果となる。

表 3

格助詞の習得順序

永 野 初出 (1959)	格助詞	2 歳 1 か月 と、の	2 歳 2 か月 から、へ、が、で、に	2 歳 3 か月 より、を、で	2 歳 5 か月 まで				
松 本 (1998)	観察週 格助詞	13 週 に	17 週 の	24 週 が、を、と、で	27 週 から、まで	58 週 へ	89 週 より		
八 木 (1996)	正用幅	91.7 ~ 93.8	87.1 ~ 83.9	70.7 ~ 88.6	91.7 ~ 78.6	74.2 ~ 76.2	75.9 ~ 78.5	68.4 ~ 77.8	67.7 ~ 63.6
	格助詞	と	の	を	から	は	に	で	が
本研究	頻度順 (L01)	に	を	と	の	が	で	へ	から
	頻度順 (L04)	に	を	と・が	の	で	から	へ	
	頻度順 (G03)	を	に	が	と	の	で	から	へ
	頻度順 (G13)	を	に	が	の	と	で	から	へ

上記の表からわかることは 3 点にまとめられる。1 点目は、学習者にとって格助詞「に」が使いやすいということである。本研究の調査結果から見れば、1 年生 (L01) から 4 年生 (L04) まで「に」の使用頻度が最も高く、この点は初出を調査した松本 (1998) の結果と一致する。しかし、多く使用することが学習者にとって定着しやすいことを意味するわけではない。表 4 に示されるように、「に」に関する誤用が最も多く、これは八木 (1996) の研究においても確認できる。このことから、格助詞「に」は中国語を母語とする学習者にとって、使ってみるという抵抗感が低い格助詞であると考えられる。誤用パターンから見れば、「に」と「を」や「から」「と」の混同が最も多く、本来「に」が不要なところに使われることが多いことが分かった。

(1) びっくりした二人は慌ててバスケットの中に→をを見てみると、食べ物は全てめちゃくちゃになりました。

(2) ケンはマリに→を呼んでみると、マリはなかなか聞こえませんでした。

例えば、例 (1) は「[NP]+を+見る」という基本構造であるが、中国語を母語とする学習者にとって、「向里面看」という中国語の考え方が影響し、「中を見る」という動作に「中へ」という方向性が含まれており、結果として方向を表す「に」が選ばれたと予想される。例 (2) も「～に呼ぶ」ではなく、「～を呼ぶ」が正しい使い方である。日本語では「～に」は「動作の対象」や「方向」を示すことが多く、

「～を」は「動作の直接の対象」を示すのが普通である。しかし、学習者は「動作の対象」を表す「に」と「動作の直接の対象」を示す「を」を混同し、「マリを呼ぶ」ことを「マリに呼ぶ」と書いてしまったのである。しかし、「マリに呼ぶ」の場合は、意味が「マリに対して何かを呼びかける」という不自然な解釈になってしまう。

表 4

訂正された格助詞の一覧

訂正された格助詞	頻度
に	54
が	48
を	43
で	21
の	14
と	7
から	2
へ	2

表 5

誤用パターン一覧

誤用パターン	頻度
が→は	38
を→に	28
に→を	17
に→×	14
で→に	10
の→×	9
に→から	9
に→と	6
が→を	6
を→から	5

2 点目は、学習者にとって格助詞「が」を使いこなすのが難しいということである。松本(1998)、八木(1996)および本研究の調査結果に基づくと、「が」の初出が遅く、使用頻度は比較的少ないわりに誤用が多いことがわかる。最も典型的な誤用パターンは「は」との混同で、次に「を」との混同が見られる。

(3) マリが寝ていますから、ケンは何度も呼びますが、マリが→は目覚めませんでした。

(4) 最後に、料理が全部食べて終わったということが→を発見してびっくりしました。

例えば、例(3)のように、新情報と旧情報の違いで「が」と「は」が使い分けられているが、学習者はその点を十分理解できていないことがうかがえる。また、例文(4)の場合は、「～が発見され」と「～を発見して」のヴォイスの誤りがあった。このように、「が」の正しい用法に対する理解不足と自信のなさ、使用頻度の少なさにつながっている可能性がある。しかし、発達に伴い「が」の使用頻度が増加することは、本研究の調査結果で明らかになっている。

3 点目は、「と」と「の」が学習者にとっても、母語話者にとっても定着しやすい格助詞であるということである。永野(1959)の研究では、日本語母語話者が最初に「と」と「の」を習得することが示されている。本研究でも、学習者は1年生からこの2つを使用し、その使用頻度が高く、誤用もそれ

ほど多くなかった。

最後に、各誤用パターンを調べたところ、表 6 が得られた。

表 6

各誤用パターンの変化

	第01回	第03回	第05回	第07回	傾向
が→は	13	7	10	8	
を→に	4	14	7	3	
に→を	0	7	6	4	
に→×	2	7	4	1	
で→に	4	3	3	0	
の→×	6	0	3	0	
に→から	5	0	2	2	
に→と	1	3	0	2	
が→を	3	2	1	0	
を→から	1	2	1	1	

表 6 に示す通り、各誤用パターンは「逆 U 字」型(例:を→に、に→を、に→×)、「減少」型(例:で→に、が→を)、「波」型(例:が→は)の 3 つに分類できる。このように、「波」型以外の誤用パターンについては、格助詞の誤用率が日本語習熟度の上昇につれて減少することを確認された。

4.2 RQ2 発達段階の予測

本節では、学習者の SPOT や J-CAT の得点を従属変数、各格助詞を説明変数として重回帰分析を行ったところ、以下の回帰モデルを得た。

$$\text{SPOT}=56.820+1.447「に」+0.796「の」 \quad (\text{Adjusted R-squared: } 0.305)$$

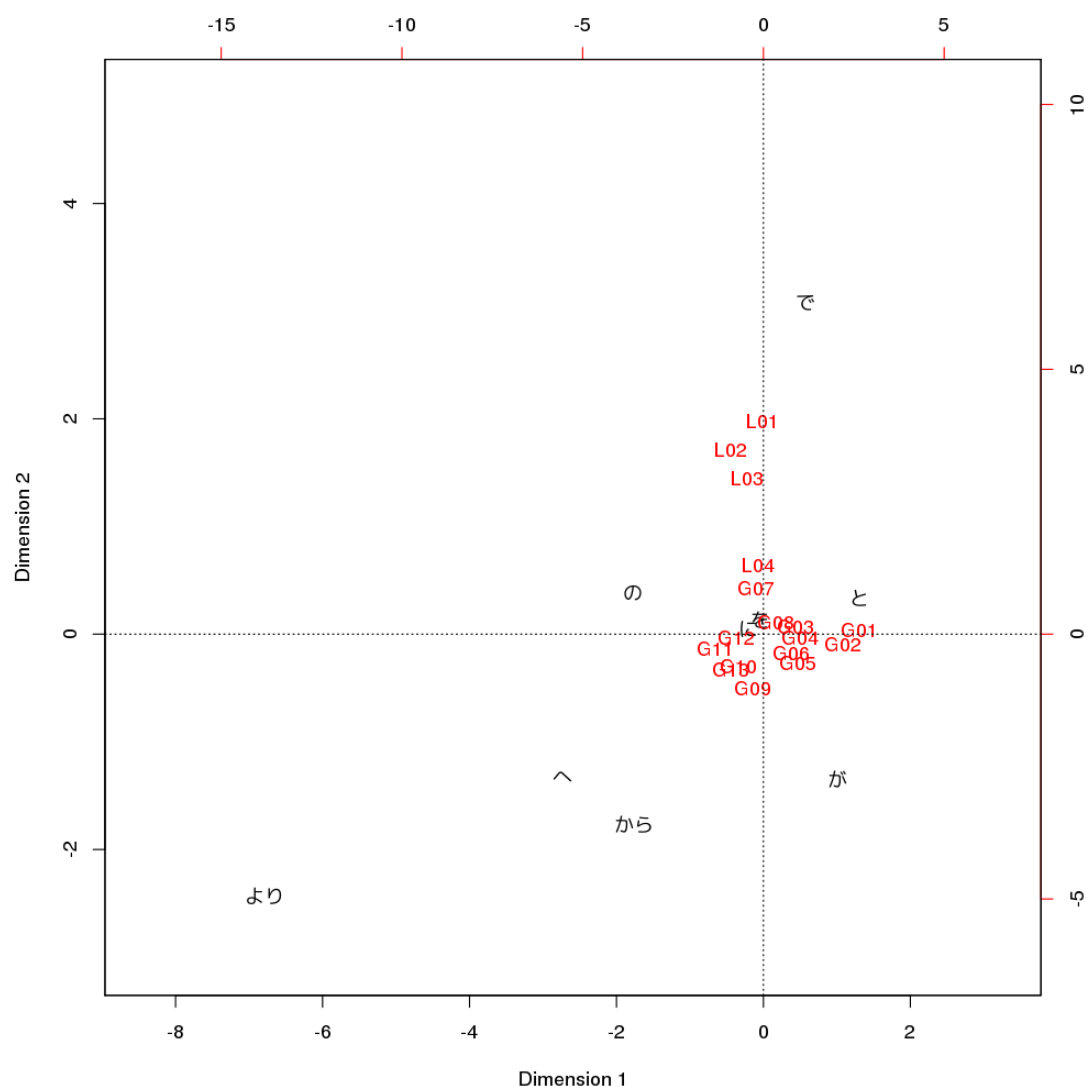
$$\text{J-CAT}=136.773+8.360「に」 \quad (\text{Adjusted R-squared: } 0.209)$$

重回帰分析の結果から見れば、説明力は 20～30%であり、必ずしも高くはないことが示された。「に」もしくは「に」と「の」の使用頻度だけで学習者の日本語レベルを予測することは難しいと考えられるが、それでも「に」もしくは「の」の使用頻度が学習者の日本語レベルをある程度説明していることが示唆されている。

次に、コレスポンデンス分析を実施ところ、以下の散布図を得た。第 1 次元寄与率は 56.15%、第 2 次元寄与率は 16.61%であり、2 次元で全体の 72.76%を説明している。なお、母語話者のデータの中で、13 学年中の G07 はデータ量が最も少なく、いくつかの作文が例外的に長いため、全体の値に影響を与えていることが示されている(石川他、2023)。

図 2

コレスポネンス分析散布図



全体としては、下向きの矢印、すなわち「↓」の形を形成している。学習者は縦軸に沿って原点に向かって進み、母語話者は横軸に沿って横に分布している。このことは、学習者と母語話者の発達ルートが異なる系統で進むことを示唆している。具体的な違いとしては、母語話者は早い段階で「が」を習得するのに対し、中国語を母語とする学習者は「が」の習得に難しさを感じており、比較的早い段階で「で」を習得していることがわかる。

また、母語話者のデータは 3 つの段階に分かれていることが示されている。具体的には、G01 と G02 がひとまとまりとなり、小学校低学年を代表している。また、G03～G06 の小学校中高年のデータがまとまり、中学校から大学 1 年生にかけてはさらに固まっている。学習者は学年が上がるにつれて、「の」「と」「を」「に」を多く使用できるようになり、母語話者の小学校から中学校にかけての進行状況に近づいていく。これは、学習者と母語話者の格助詞の発達のルールが異なることを裏

付けており、言語学習の環境の違いが格助詞の発達に影響を与えていることが明らかになった。

最後に注目すべき点は、母語話者と学習者の双方において、格助詞の使用頻度が U 字形の変化を示すことである。第二言語習得における U 字形発達(U-shaped development)(Kellerman, 1985)が指摘されており、これは、一度正しく習得された言語項目が、誤用を経て再び正しく使用されるようになるプロセス、すなわち「正用—誤用—正用」の順序をたどる現象を指す。格助詞の使用に関しては、誤用の増減という形ではなく、使用頻度の観点から U 字形の変化が確認された。具体的には、母語話者のデータでは、G01 から G09 にかけて使用頻度が減少し、G10 から G12 にかけて徐々に増加する傾向が見られた。一方で、学習者のデータでは、観察期間は 4 区分のみであるものの、L01 から L02 にかけては使用頻度が減少し、L03 から L04 にかけて上昇する傾向が確認された。

5. まとめ

本研究では、B-JAS という縦断学習者コーパスと JASWRIC という母語話者コーパスを用いて、母語話者のデータと比較しながら、日本語学習者の格助詞の使用傾向と発達過程を分析した。その結果、学習者の格助詞使用は全体として上昇傾向にあり、増加するスピードも比較的速いことが確認された。しかしながら、学習者は依然として母語話者の小学校 4 年生のレベルには達しておらず、特定の格助詞の使用に偏りが見られた。

具体的には、「に」の多用に対して「が」の使用頻度が低いことが明らかになった。また、誤用のパターンとして、「逆 U 字」型、「減少」型(「で」→「に」、「が」→「を」)、および「波」型(「が」→「は」)が確認された。さらに、「に」または「に」と「の」の発達を指標とすることで、学習者の日本語能力の 20 ～30%を予測できる可能性が示唆された。

これらの結果を踏まえ、日本語教育においては、学習段階に応じた適切な格助詞指導が求められる。具体的には、初級段階では格助詞の基本義(プロトタイプ義)を重点的に教え、中級段階では混同しやすい格助詞の弁別指導を強化することが重要である。さらに、高級段階においては、「が」と「は」の違いを十分に理解させる指導が必要となる。

本研究では、格助詞の語義別の詳細な考察は行っておらず、今後の研究において補完する必要がある。また、今回の分析は「鍵」と「ピクニック」という制限された課題に基づくものであり、完全な自然産出とは言い難い。そのため、より多様なデータとの照合を行い、より普遍的な傾向を明らかにすることが求められる。

引用文献

- 芦野文武・伊藤達也(2022)「現代日本語における格助詞「から」の体系的記述に向けて」『慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション』 54, 1-21.
- 石川慎一郎(2017)「現代日本語における『デ』格の意味役割の再考」『計量国語学』 31(2), 99-115.
- 石川慎一郎(2023)「学習者コーパス研究における横断・縦断データ統合の意義: I-JAS と B-JAS

- をめぐって』『言語資源ワークショップ 2023 発表論文集』 1, 8-25.
- 石川慎一郎・友永達也・大西遼平・岡本利昭・勝部尚樹・川嶋久予・岸本達也・村中礼子(2023)『『小中高大生による日本語絵描写ストーリーライティングコーパス』(JASWRIC)の構築: L1/L2 日本語研究の新しい資料として』『国立国語研究所言語資源ワークショップ発表論文集』 7, 393-416.
- 于康(2013)「中国語母語話者の日本語学習者の『格助詞』不使用について: 格助詞『が』の不使用を中心に」『言語と文化』 16, 59-75.
- Kellerman, E. (1985). If at first you do succeed. *Input in second language acquisition* (pp.345-353). Rowley: Newbury House.
- 白畑知彦・久野美津子(2008)「中国人児童による日本語格助詞の発達過程の記述: 来日後 4 ヶ月間の記録」『静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会科学篇』 58, 143-158.
- 杉村泰(2010)「コーパスから見た中国人日本語学習者の格助詞に関する問題点について」『言語文化研究叢書』 9, 137-152.
- 鈴木一徳(2021)「第二言語としての日本語の格助詞脱落: Kanno(1996)の概観とその応用可能性」『文教大学文学部紀要』 35(1), 37-46.
- 鈴木孝明(2007)「単一項文の理解から探る幼児の格助詞発達」『言語研究』 132(0), 55-76.
- 趙墨(2015)「格助詞学習における日本語 5 歳児の言語情報の利用: 人工格助詞を用いた文理解実験から」『広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部, 文化教育開発関連領域』 64, 187-196.
- 永野賢(1959)「幼児の言語発達について: 主として助詞の習得過程を中心に」『ことばの研究(国立国語研究所論集)』 1, 383-396.
- 西川朋美・青木由香(2020)「日本生まれ・育ちの JSL の子どもの格助詞の産出」『日本語教育』 177, 47-61.
- 初相娟・玉岡賀津雄・早川杏子(2013)「中国人日本語学習者の場所を表す格助詞『で』と『に』の習得に影響する諸要因」『日中言語研究と日本語教育』 6, 59-70.
- 藤友雄暉(1979)「幼児の助詞の習得に関する発達的研究」 *The Japanese Journal of Educational Psychology* 27(1), 11-17, 1979.
- 丸山直子(2015)「コーパスにおける格助詞の使用実態」『計量国語学』 30(3), 127-145.
- 水口里香・森山新(2006)「日本語学習者と日本語母語話者の持つ『で』の категория 構造比較」『日本学報(韓国)』 66, 43-54.
- 村尾愛美(2024)「文法関係と格助詞との対応が格助詞の使用に及ぼす影響: 少数事例の予備的検討」『東京学芸大学紀要. 総合教育科学系巻』 75, 229-236.
- 森山新(2002)「認知的観点から見た格助詞デの意味構造」『日本語教育』 115, 1-10.
- 八木公子(1996)「初級学習者の作文に見られる日本語の助詞の正用順序: 助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に」『世界の日本語教育』 6, 65-81.
- 李坤(2023)「格助詞『を』の過剰使用と不使用に関する一考察」『ことば』 44(0), 91-108.